

## 開運橋よ まだ元の姿のままか

— 愛しきかな杜が岡 —

### 岩手女子師範学校

ただの普通の学校が、その県都の最中心地に位置するということは珍しい。私が昭和20年敗戦前後3カ年勤めた岩手女子師範学校がそれだった。お城の大手門跡に小池をはさんで接し、有名な石割桜と向かいあい、後方は名水の御田屋清水に続いている。いまでは信じられないほどの絶好の地である。でも、もうその学校はない。私が盛岡を去って間もなく不審火で全焼したからである。学校管理者たちの暗闘と腐敗で、起こるべくして起こったという内部の声が聞かれた。

昭和19年4月半ば、盛岡での第一夜が明け、水を使おうとして受けたショックは今も鮮やかに蘇る。水道水がまるで雪解け水、手は凍りつく。そういうえほどの軒下にも残雪が部厚い。「みちのく」とはこういう所だったのか。

食糧事情の急迫はここも同じだった。解きがたい旅愁

をふりほどくが如く、私は市内を歩き回った。関西育ちには風物絵てが美しく、ひとの心の優しさは旅人の心をとりこにするのに一月もかからなかった。駅構内を少し離れた線路沿いにもずらんが自生していた。まだ盛岡は自然の真っ只中であつた。美しい風物は決まって心美しい人たちと共にある。その人たちとのつながりがあつてこそ、その地への想いは具体的であり永続的である。文の始めに岩手女子師範のことをのべたが、その生徒たちとの出会いがあつたればこそ、3年の滞在でも盛岡が我が心の故里として今に生き続けている。

師範といえはその頃の富裕でない家庭の才子才媛が集まる唯一の学校であつた。月謝は不要、毎月相当の支給金もあつたから。卒業生は教師として日本を底辺から支えた人材網だった。

ついに青春はなかつた

彼女たちは全寮制、飢えに苦しんだ。白い美しい顔に

生氣はない。しかし、眼だけは輝きを失っていないかった。やはり青春。精神的飢えにもあえいでいた。あたえられるものは滅私奉公、鬼畜米英のプロパガンダだけだったから。「愛」の語は絶対タブー。

寮の風呂はすでに燃料は尽き銭湯へ。彼女らは上下黒のモンペ制服で隊伍を組んで内丸通りを行進する。洗面器を左手にかかえて。余りにも異様さに私は進言した。「入浴ぐらい三々五々で自由な気持ちにさせては」と。聞き入れられる学校ではなかった。

私は教育学・哲学・公民等の学科を受け持ち、25歳頃だった。ストーブのない教室は零下10度以下。飢えの上はこの寒さ。私はオーバー着用を命じた。命令しなければ彼女らは絶対着ないからである。「先生も着て下さい。でないと私たちは・・」優しい岩手の乙女たちである。多くの先生たちは気づかぬふりをしてみすごしていたが、ひとりの国粹主義一辺倒のH氏は一喝した。「この非常時にオーバー着て授業を受けるとは。非国民だっ！」と。

「先生によって着たり脱いだり、私たちは気をずいぶん使いました・・」と今年の年賀状で、その頃のひとり千葉芳子さん（元・小学校長・盛岡市）が思い出を語っていた。

『国体の本義』は私の学科の絶対的な教材、全教員共通の教科書だった。超国家主義のひどい内容、先のH氏

らの絶対奉持の書。私は生徒たちに言った。「平易な文章だから特に説明はしない。疑問点はどしどし質問せよ」。質問はない。だから私はとくに説明しなかった。彼女らが心配りしたのでだろう。彼女たちのほうが上手だった。その代わり、日本文化の紹介に微力をつくした。解説で愛と美を離れることはなかった。

#### 城跡は教室

啄木や宮沢賢治の詩歌の時は、お城のクローバーの生え敷く木陰に集まった。三省堂国語辞典の編者見坊豪紀さんもその頃この先生、時どきこの青空教室に顔を出された。父君は元盛岡市長という名門とのことだが、それを感じさせない人柄は今も懐かしい。賢治の歌に子供の頃から特別詳しい花巻出身の娘がいて、よく歌唱をリードしてくれた。ソプラノ響きゆく彼方に、きまつて姫神のやや傾いた神秘の頂があった。

10年ほど前、その頃の娘たちもう定年退職する教師たち―の同級会に招かれた。ひとりが言った。「卒業の日、吉田先生に最後のお言葉をお願いしたら、一言、この学校で習ったことの正反対のことをしておれば間違いないよと。私はずっとその言葉を胸に、教壇に立つてきました」。

会場はどっとわいた。私も陽気らしさを意識して大いに笑った。心の中は、しかし、暗い方へと傾いていくの

をとめようがなかった。

盛岡を去る日、鉄骨むき出しの開運橋の手すりを私は  
さすった。出る時、入る時必ず通らねばならないこの橋。  
もう開運橋も今風に姿を変えてしまっているのだろうか。